

Newsletterは、東京YWCAの事業活動を皆様にお伝えするための広報紙です。毎回特集で取り上げる事業を中心に、東京YWCAの今をお届けします。

特集

にほんご
学習支援

日本語を母語としない親をもつ外国ルーツの子どもたちが、ボランティアと一緒に日本語や学校の勉強をしています。時にはおしゃべりや、楽しい時間を持ちながら、「わかった!」と思う経験を重ねている「いちごの部屋」についてお伝えします。

“外国ルーツの子どもと共に、”

現在、全国で学校に所属し日本語指導が必要な子どもは約5万人※、その数は年々増加しています。彼らへの日本語支援は、自治体によって異なり、地域や状況によって十分な支援の場がないことがあります。「いちごの部屋」は、武蔵野市にある東京YWCA武蔵野センターで、外国ルーツの小学生とその保護者の日本語・学習支援を行い、日常や学校の教科学習をサポートしています。「いちごの部屋」の特徴は、複数の異なる国・地域から少人数が集まっているということで、これまでに15を超える国・地域のルーツを持つ80人の子どもが来室しました。

1人ひとりの意欲を育てる 多彩な学びを

十分な日本語支援が得られず、先生や友達とコミュニケーションがとれない、ま

た、勉強が分からず学校に適応できなくなることで子どもたちは自信や自尊心を失っていきます。「いちごの部屋」は日本語・学習支援の場ですが、子どもたちがありのままの姿で安心していられる場であることを目指しています。

子ども1人に対して支援ボランティア1人がついて対応しています。勉強に意欲的な時があれば、気持ちが向かない時もありますが、様子を見ながらお喋りをしたり、分数が苦手な子どもにはお菓子を使って説明したり、教科書の単語を使った手作りすごろくなどの楽しい工夫をすることで、教科書を遠ざけていた子どもも、笑顔で学習しています。

2018年には、初めてキャンプを実施し、日本に来たばかりの子どもも参加しました。大好きな虫との出会いや野外アクティビティなど、たくさんの刺激を受けて

自然に日本語が出始めました。興味を生かした学びは、子どもたちの大きな力になることを実感しています。

これからますます求められる 日本語支援・学習支援の場

ボランティアは、大学生から80代まで様々な経歴をもつ約20人が、外国ルーツの子どもを取り巻く状況や学習指導の方法など、定期的な研修を経て、学習支援に参加しています。日本語・学習支援を通して、子どもたちが日本の生活に希望をもって歩めるよう、支援を続けたいと考えています。一方、事業の継続のために財政基盤の確立も課題で、個人や企業からの支援に支えられています。

※出典：「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査(平成30年度)」の結果について(文部科学省 報道発表 令和元年9月27日)



外国ルーツの子どもが 安心できる居場所

一人ひとりに寄り添う姿勢を大切に 多様なニーズにこたえる

「いちごの部屋」は2008年、この1回に丁寧に向き合いたいという思いで、一期一会の言葉から名前をつけました。開始時は土曜午前のみでしたが、2016年度から木曜夕方と合わせ週2回開室しています。当初は小学生が中心でしたが、就学前の子どもや中学生、公的支援を受けられないインターナショナルスクールの子どものにも広がっています。市内の自治体関係の紹介のほか、近年は、近隣自治体や支援団体の紹介や、HPを見ての来室など、広域からも通ってきています。2019年度は10か国・地域20人の子どもが来



「あっ、ぼうずだ！」勉強の後はみんなで過ごす自由な時間

室しました。一人ひとりが持つ背景は様々で、通う学校や年齢、日本での滞在期間などにより、学習目的も異なります。支援開始時には保護者と子ども本人と面談を行い、支援の内容を決めています。公的支援を受けながら通う子どももあり、地域の支援機関との連携にも力を入れています。

みんなのロールモデルとなる憧れの存在 遊びにきてくれる優しいお兄さん

 **バタライ・リーザンさん**(いちごの部屋卒業生)に聞く


リーザン君は、中学1年の時にお父さんが働く日本に来ている最中に、母国ネパールで大地震が発生、やむなく日本で暮らすことになりました。最初は全く日本



野崎さん(左)とリーザン君(右)

語が分からず、学校での支援の他にも勉強がしたいと、「いちごの部屋」に通い始めました。平仮名や漢字の書き取り、教科書を読んだりした他、学校の友達と話ができるように英語や日本語で自分やネパールのことを話す練習もしていました。勉強が分ると感じ始めたのは中学2年生の後半だったそうです。いちごの部屋で受験勉強もしていました。現在は高校2年生になり、学校の課題やレポートも不安なく取り組むことができ、大学進学を考えているそうです。

自分に自信をもって 日本で生活してほしい

 **野崎斐子さん**(いちごの部屋ボランティア)

国での大震災により突如日本で暮らすことになったリーザン君が前向きに生活できるよう、また自分の国に対する自信を失わないよう心を配りました。日本語学習では、一日も早く授業に参加できること、クラスの中で友人関係が結べることに照準を合わせた内容を心がけました。ひたむきに努力する一方、客観的な視点で物事をとらえるリーザン君の姿勢に、私も学ぶことが多くありました。こんな先輩がいることで多くの子どもが勇気づけられるに違いありません。

様々な状況に対応して 多文化共生社会の一助に

長年通ってきた小学生が中高生になった時に引き継げる支援組織がない、不登校の子どものために平日昼間に支援をする必要性、日本語を初めて学ぶ子どもに初

期指導ができるボランティアの不足、今いちごの部屋が直面する課題です。今後、必要に応じた支援ができるように人材を充実させ体制を整える必要があります。個々に事情を抱える外国ルーツの子どもをサポートして地域で受け入れていける「いちごの部屋」でありたいと思います。



夏休みの思い出。楽しい科学実験

この取り組みに関するお問い合わせ先

東京YWCA
武蔵野センター

☎ 0422-27-5871 ✉ musashino@tokyo.ywca.or.jp
🏠 https://www.tokyo.ywca.or.jp/child/study_support/



ファミリー対象自然体験プログラム

子どもの自然への関心を引き出し、 四季折々の自然と触れ合うことを楽しむ

「みんなで楽しむアウトドアライフ」は、東京近郊で行う日帰り自然体験です。田植え・稲刈り・脱穀・餅つきと年間を通して稲作文化を体験する「おこめシリーズ」と昆虫・鳥・樹木などに触れ、その魅力や不思議を学ぶ「いきものシリーズ」があります。それぞれの専門家が講師となり、子どもの好奇心や探求心を育むプログラムです。田んぼや公園にいる生き物がなぜそこに生息するのか、自然と人などがどのように共存してきたかなど、活動を通して命の大切さを教えてくれます。保護者は我が子が自然に夢中になる姿に驚き、感動することもあります。日常とは異なる環境と一緒に自然を楽しむだけでなく、子どもの成長や新たな一面を発見する機会にもなっています。



講師は参加者の疑問に丁寧に答えます

肢体不自由者水泳 「あひるの会」

水泳を通してスポーツの楽しさを経験 ボランティアと共に喜びを分かち合っ

あひるの会は、陸上での動きに制限のある参加者が水泳を通して喜びと自信を得ることを目的に、介助ボランティアと共に競技ではなくレクリエーションとして行っている活動です。「プールに来ると体が軽くなり、楽になる」「ボランティアさんや皆に会うのが楽しみ」と参加者。一方ボランティアも参加者の笑顔や水泳の上達に喜びを分かち合えます。安全で快適な運動のため、ボランティア研修は介助方法や水泳指導を中心に毎年行っており、新しい仲間も募集中です。



ボランティア同士で車イス介助の練習中

障がい児「きょうだいの会」 これからもご支援ください

前号の特集に大きな反響がありました 多くの方からのご寄付に感謝します

きょうだい児(障がい児を兄弟姉妹に持つ子ども)が主役のプログラム「きりりんこ」では、今年度も子どもたちが思いきり楽しめるような活動を計画しています。ボランティアの中には、自身もきょうだい児という人も増えています。



たこ焼き作りに挑戦!

国際語学ボランティアズILV

英語の通訳・翻訳でNPO/NGOを支援

今年秋、ILVは30周年を迎えます。英語のスキルを活かした活動は、依頼案件から日本国内外にある課題に目を開かれてきました。今後も時代のニーズに応え活動を継続します。

● 東日本大震災被災者支援事業 放射能を測り続ける母親たち

10月19日にNPO法人いわき放射能市民測定室たらちねの職員を講師に招き、いま福島母親たちが放射能について思っていることを聞き、参加者と話し合いました。9年がたちますが、放射能の半減期を考えれば、これからも測り続けることが、子どもたちの将来に対する私たちの

責任であるとのことばが印象に残りました。10月の台風19号はいわき市にも甚大な被害を与えました。たらちねを通して支援物資を届ける一方、夏のキャンプに参加しているいわき市の障がい児施設が水没したため、事業再開を支援する緊急募金活動も実施しました。



講師の話に熱心に耳を傾ける参加者

